

著者と人格の諸領域 留学生向け日本語チューターを事例に

田口陽子（一橋大学）

私たちが普段経験しているように、アカデミック・ライティングは共同的な営みである。ある論文には書き手を取りまく環境や関係が織り込まれている。しかし論文を発表するさいは（共）著者を特定しなければならない。論文執筆に不可欠であっても、助成機関や教師や同僚や校正者を著者に含まないことが、社会科学の領域では一般的である。このように著者を分別するやり方は、著作権をめぐる科学技術論やライティング教育論において議論されてきた。しかし日本の大学においては、理念や方法が共有されないままライティング指導が行われていることも多い。本発表は、東京の大学における留学生向け日本語チューターを事例とし、現場の大学院生チューターによって著者性と人格の諸領域が交渉されている過程を検討する。

著者とテキストの関係は、いくつかの転換をへて、自らの独創性を源とした個人的な表現に対して著者が獲得する権利として成立してきたとされる。古来、物語や民話は著者が同定されないまま流通していたが、中世における自然科学を扱ったテキストは著者名が示されることによるのみ真実であるとされた。フーコーによると、この関係は17-18世紀頃に転換し、科学的なテキストの真実性が匿名的な実証によって担保されることになった一方で、文学的なテキストには著者名が不可欠となった。その後の法整備によって、著者には作品を所有する権利が与えられてきた [フーコー 2006]。

文学とは異なり、現代のアカデミアにおける科学的な著作物は、(科学者の個人的な表現ではなく)自然の真実を主張するものなので、科学者の所有物とはされない。著作物があまりに独創的だと、それは事実ではなく創作・偽物とみなされてしまう。さらに科学者の主張は、同業者（ピア）によって査読され出版されなければ、著者に報酬をもたらさない。ピアジョーリによると、科学における著者性は「権利」ではなく「責任」を伴う「報酬 (reward)」である。この報酬は「象徴的」なものであり、将来的に金銭（奨学金や研究費や職）に変わるかもしれない承認の印を指す。さらにこれらの報酬は特定の国の法律に基づくものではなく、ピア・コミュニティによって、しばしば暗黙の慣習に従って与えられる [Biagioli 2003]。科学における著者は、作品の制作者であると同時に、ピアによって（承認され、報酬を受けることで）「作り出される」人格でもある。

北米の大学で一般的なライティング・センターもまた、独自の著者／人格を作り出す教育技法を洗練させてきた。その理念においては、書き手（チューター）の「オーサーシップを護る」ことが重視されている。著者のアイデア（オーサーシップの源泉）とその成果物である文章表現を区別するために、専門分野の知識とライティングの技術を切り離すことや、『紙を直す』のではなく『書き手を育てる』ことが強調される。チューターはトレーニングを通してこうした切り分けを身につけ、書き手とともに適切な主体として「成長」していく [佐渡島紗織、太田裕子 2013]。

他方、こうした理念の共有や訓練が行き届いていない日本の大学において、現場のチューターを悩ませているものには、留学生の書いた文章を正しい日本語に書き換えていくという権威的な「ネイティブ・チェック」担当者としての役割も含まれる。チューター実践の現場では、「言葉の誤用と内容の意味」、「外国語運用能力と学生の脳内にあるアイデア」、「中身と出力方法」が切り分けられない現実を前に、学生チューターが手持ちの知識や資源や装置を用いて、著者の領域を切り分けようとしている。

アカデミックな著者とそこに付随する責任や報酬は、知的所有権のような包括的な法的カテゴリーで定められるものではなく、個々の分野や研究室における特定の関係性のなかで形づくられていく。チュータリングをめぐる著者性は、北米型のライティング教育理念によって完全に解決できない問題であり、それぞれの研究共同体によってより善い実践が探究されていくべき問いであろう。本発表では、そうした探究の事例を提示することで、人類学的な議論の糸口としたい。

参考文献

Biagioli, Mario. 2003. Rights or Rewards?: Changing Frameworks of Scientific Authorship. In *Scientific Authorship: Credit and Intellectual Property in Science*. Mario Biagioli and Peter Galison (eds.), pp. 253-279. Routledge.

フーコー、ミシェル 2006 「作者とは何か」『フーコー・コレクション2 文学・侵犯』小林康夫、石井英敬、松浦寿輝（編）、pp.371-437、筑摩書房。

佐渡島紗織、太田裕子 2013 『文章チュータリングの理念と実践：早稲田大学ライティング・センターでの取り組み』ひつじ書房。

キーワード：著者性、人格、ライティング教育、日本語、ネイティブ